

編集後記

去る2006年2月16日から26日まで、ブラジルのサンパウロで開かれた第30回国際眼科学会に出席のため出張した。ブラジルは地球の反対で遠いとか、治安が悪いとか言われていたが、行ってみると気候も夏といっても日本の初夏の感じで治安も心配なく、快適であった。もっとも20年余りに前に教室に2年ほどいた日系ブラジル人の兄弟が世話をしてくださったからであろう。日本語で用が足りたし、食事も美味しい日本食が食べられた。しかし、日本語が話せるのは3世までで、その子どもたちは日本語がほとんど話せないそうである。また、ブラジルは日本以外には日本人が最もたくさん住んでいる国だが、例えばサンパウロの日本人街は韓国人や中国人が入り込んで、もはや日本人街とは言えなくなっている由であった。

数年前、ブラジリアに招待されて行った時は、未だインフレの最中で、何百万リアルが1米ドルであったが、今度は1米ドルが2レイとスッパリしていた。南には白人、アマゾン河辺りの北には黒人が多い。今年はアマゾン河が渇水で、遠い将来その流域は砂漠になる(地球温暖化で)という予想もある。海岸に豊富な石油資源がみつかった、前に行った時アルコールをガソリンに入れて自動車が走っていたが、そんな必要はなくなりそうだと言っていた。ブラジリアに行った時、一面見渡す限り大豆畑で、生産量は世界一である。

BRICs(ブラジル、ロシア、インド、中国)といって、土地も人口も資源も日本の何十倍もある国(それにしても貧乏人が多い)が世界の将来を担うのでは、と言われる。シンガポールはその対極にあって、科学技術を振興して国を立てようとしている。日本もその範疇に入る。シンガポールに近いオーストラリアはノーベル生理学賞が10個と日本を引き離している。

本号では、共立シンポジウムでこれらの地域での臨床試験について論じられているが、上に述べたグローバルな立場を踏まえての議論が期待される。

(中島 章)